



名人雑話

名指導者 (その一)

木谷蓬吟

藝道の自信に最も強かつた名人團平は、濫りに人を褒めなかつたが、朝日新聞記者が越路(攝津大掾)と彌太夫(五世、堀江の大師匠と俗称)と、どちらが本當に巧いのですかと尋ねたに答へて、両太夫とも巧いが、越路は無重櫻で、彌太夫は山櫻。一は質実で、位に於て優れてゐる、と云つた。その山櫻彌太夫の、異色ある藝格については別に語る事として、こゝには彼の、稀有な名指導者であり、後進者薫育の良師父としての人格的一面を覗いて見よう。

今日の文樂座には、將來性ある若手も乏しくないが、如何せん適良な指導師

匠が無い爲に、六道の辻に迷つてゐる状態に見受けられる。遺憾なことであり、氣の毒な事でもある。この際、こんな昔話でも何かの参考になるのではあるまいか。

明治の末年には、文樂、稻荷の両座を始めとして、野に遺賢も多く稽古専門の町の師匠も榮えてゐた、それに物質を離れて稽古三昧に陶醉する玄人以上の素義の上手も少くはなかつた。それ等が競ふて師匠臺に名乗りを上げたから、後進者は心しだいで、どんな勉強も出來た。その數多い師匠臺の中にも、所謂堀江の大師匠と称せられた彌太夫は、雞群の一鶴として信頼の的となつた。

實際、舞臺以外の彼の生活、彼の趣味は、たゞ「稽古」といふ二字の外、全く何物も無かつた。

彼は舞臺を別として、後進者養成薫育、あらゆる淨瑠璃修行者への稽古を、生涯の天職として奉仕したものであつた。それは慰樂を主とする素人義太夫を除いて、他は總て報酬を取らなかつた一事でも、窺知されることであらう。

彼の淨瑠璃塾に雲集した人々は、直系門人は云ふまでもなく、他門の後進者、三味線弾き、女義太夫、義太夫藝妓、多數の素人衆の他に、地方から田舎師匠の滞留稽古の夥多しかつたことは、殊に彌太夫塾の異彩であつた。中には塾に寄寓して家事を手傳ひながら、稽古だねを學んで帰国する者もあり、絶えず二三の食客門弟があり、太夫志願の地方青年などには、修行難を説くも断念せず、玄關に居するデモ弟子もあつた。こんな風で、北堀江の本宅と、北浜の両稽古場は、朝早くから夜の更けるまで、殆どデン／＼の絶え間は無かつた。その教えを受けた人たちは、少くも三千以上と云はれてゐた。但し、この數字の誇張でないことは、次の理由が明示してゐる。

天下の檀下ともあらう者が、無報酬（素義その他二の除外例は別として）で教えるといふこと、門戸を開放してその至妙の藝を惜氣もなく終日終夜語つて聞かすといふこと、（たゞ聴くだけでも、その風貌に接するだけでも結構だといふ、聊か計算的不料簡もまさつて）しかし、此等よりも眞面目な理由として、全く彼の傳える藝道の正しさ厳しさ深さは云ふまでもないとして、何人にも平等に、懇切、鄭重、熱意と誠心で教導し、決して叱責怒號しないのが特徴と云はれ、扱ひ方に公平無私であることが喜ばれた。更に、その教授法が、劃一主義を打破つて个性的指導に徹したことが、最大理由として称讃に絶してゐた。（此等の実例は後に、稽古人の「声」によつて叙べよう）随つて、その自然の成果として、斯道の秘密とする口傳とか、奥儀とか、語り方、表現の秘訣なども、何の惜氣もなく、ドシ／＼と投げ出しての傳授ぶりは、何人も瞠目仰天されたものである。これも門人たちから聞いた実話を整理して後述する。

これらの彌太夫独特の教授ぶりが、言ひ傳へ聞き傳はつて、千客萬來の大入満員となつたのである。

彌太夫歿去の際、直系門人を數えたが、六世彌太夫、住太夫（先代）、染太

夫、新穀太夫等一流顔以下百餘名に上つてゐる。門人以外の稽古人は、津、土佐（當時伊達）、駒、角、春子、綾、相生、長尾太夫等を始め、當時の太夫三味線弾きの大部分は、芝居出勤毎に其役場の稽古のため馳せつけた。殊に稀に出る古狂言など通した場合、切場は兎も角、端場とか大序とか、その他軽い役場は殆ど知る人は無かつたから、こうした場合は、平素あからゆる院本の各場面の語り、三味線の朱章を、丹念忠実に整理註寫して備えてゐた、彌太夫の書庫に殺到した。それを一々精細親切に教授した、時に演出に工夫を加えて、より良き役場に仕上げてやつた事も屢であつた。伊達太夫（土佐）がツヤ物以外の腕を認められたといふお千代半兵衛八百屋の端場や、野崎村の口「あいたし小助」など、彌太夫丹精の庇蔭である。角太夫の出世狂言、伊勢音頭油屋の端場が語り所がないのを氣の毒と、自分の切場のおこんのクドキを譲つてやり、私の悪声でやるより、あなたの美声で語る方が嗜れ立つ」と云ふた。先代源太夫が廿四孝十種香の奥、小手返しの珍しい持役の時、知る人がなく、稽古に困つた際に救はれ、大江山羅生門の、おふくの出の「東山のナア、お月でやる」の歌も、覚えた人がなく、これも堀江へ走

つて教えを受けたと、こんな例は枚挙に遑がない。

藝道熱心な越路太夫は、文樂系以外、他流研究のため、密かに彌太夫の門を潜つて教えを請ひ、多くの口傳を受けた。彼が攝津門下の筆頭でありながら、一時彌太夫張りとし世評に上つたのも故ある哉で、彼が生來の薄い腹を練達して、人を驚かすその「ヤ」声の強調に成功したのも、その口傳練習の賜物である。剛腹な先代大隅太夫でさへも、彌太夫の道明寺の覺壽を聴いて「エライ事やりをる」と驚き、その足で直ぐ稽古を請ひ、更に沼津、佐太村の櫻丸切腹など、ミツシリ三日がけの傳授を受けてゐる。（道明寺については後に紹介する）

東京の相生太夫が文樂出勤、藝風水に合はず、清元淨瑠璃などと、評判上らず、明烏の山名屋の時、座主文樂翁の注意で彌太夫に師したが、髮結お辰の意見、彦六の道化で、面目一新、以來その名が高まつたことは、今なほ樂屋話に遺つてゐる。勘當二十幾回といふ稽古嫌ひの長子太夫（後の六世彌太夫）が逃げ廻るを、探し出しては稽古だ」と蔭口を叩かれたが、それ程彼の稽古には誠実と熱意が漲つてゐたのである。（次號へ続く）